

現場において研究を続けるということ

—個人的な経験から—

児 玉 忠 教育学部国語教育講座

1. はじめに

本稿は、平成 18 年 10 月 21 日に開催された「教育実践研究のための講演会」での内容をまとめたものである。

2. わたしのなかでの「変節」

稿者のこれまでの歩みについて、「変節」という語を用いてふりかえってみた。

① 学部生のころ

学部生（北海道教育大学・旭川分校）のころ、2 年次までは北海道方言を学べる「方言ゼミ（小野米一先生）」で学んだ。北海道で国語教師をするなら北海道のことば（方言）について深く知っておきたいという思いがあったからであった。北海道各地での方言調査はとても楽しくやりがいのあるものだった。その一方で、高校時代より詩歌につよい関心があったので、詩人・萩原朔太郎の作品を取りあげた「自主ゼミ（片山晴夫先生主宰の読書会）」にも参加した。

その後、欠員だった国語科教育の専任教官（岡屋昭雄先生）が補充されることになった。その先生に出会ってからは教員を目指すならその分野を専門的に学んで卒論を書いてみたいという気持ちがつよくなった。そして、3 年次になると、「方言ゼミ」で学ぼうと思った当初の考えを変えて国語科教育ゼミにゼミ替えをした。これが最初の「変節」となる。岡屋先生からはその後、大学院への進学をすすめられることになった。

② 大学院生のころ

その後、卒業論文で取りあげた児童詩教育史研究をさらに修士論文へ発展させることをめざして大阪教育大学大学院に進学した。研究においては、歴史的・文献的な研究を中心として学んでいった。文献調査・収集などの着実で実証的な方法を中心としたまさに王道をいく基礎研究であったし、そうした研究方法に自分なりに満足していた。

ところが、こうした研究だけでは不十分であるとのことで、当時の指導教官であった足立悦男先生から実践現場の研究会（大阪児童詩の会）に参加するようにすすめられた。しかし、こうした研究会への参加は、現場経験のない私にとって戸惑うことが多く、慣れるのにかなりの時間がかかるものだった。研究会に参加していても自分だけ現場経験がないことの居心地の悪さがいつもつきまとっていた。これが 2 番めの「変節」となる。

結果的には、大学院修了後 15 年近くも現場教員の集うこの研究会で（児童）詩のことや授業づくりのことなど、実践現場のさまざまなことを学ぶことになった。

③ 高校教諭になってから

大学院修了後、縁を得て私立の女子高の専任教諭として赴任することになった。

研究だけをしていればよかった場から責任をもって教育実践を行わねばならない場への変化は、自分自身の研究にも大きな影響を与えた。もっとも辛かったのは、自分がこれまで継続してきた研究のためのまとまった時間がかつてのようにはなかなか確保できないことであった。そのため、集めてきた文献やデータを中心としたこれまでの机の上での研究は、そのペースがぐっと下がり内容的にもレベルの低いものにならざるをえなくなっていた。

そんな折、修士論文の指導教官であった中西一弘先生から「実践の現場にいるのだから、それを生かした研究をなさい」との助言を受けた。これまで文献を中心とした歴史的な研究しかしてこなかった私にとって、この助言を生かした研究をすることは思い切った決断が必要な、私にとって3番目の「変節」だった。けれども、文献的な歴史研究が自分ながら低迷している自覚も手伝って、あえてこうした実践的・実験的な授業研究に飛び込んでみた。なかでも「書くこと（文章表現）」に関する授業研究に没頭した。

結果的には、そのようにして書きためていった実践記録をもとに、初めての著書（児玉忠『高等学校文章表現の授業』 溪水社 平成9年4月）が研究成果としてまとめられることになった。

④ 大学教員になってから

平成12年10月、弘前大学に職を得た。これまでと大きく違って、仕事のうえでは勤務校の学生を教えているだけではつとまらないことを知らされることになった。大学学部・大学院の講義・演習、卒論・修論指導はもちろん、現場の研究会などへの助言や研修の講師、検定教科書の著者、国立教育政策研究所への協力など、その仕事はきわめて多岐にわたる複雑なものであった。そして、そうした合間をぬうようにして自らの研究活動も持続的に展開していく必要があった。

大学教員としての研究では、これまでやってきたような個人での研究よりもグループでの研究が重んじられる傾向があることから、個人研究と並行して全国各地の研究仲間を声をかけて科研費によるグループ研究を展開することにした。全国各地の研究者を集めた研究で、しかも研究者がいるそれぞれの地域性を生かした研究テーマを設定するという一方で、弘前大学に赴任してからは「方言・地域語教育」という新しいテーマに取り組み始めている。これが私にとっては4番目の「変節」となるのか。

結果的には、地方大学にあって、月例の研究会で同じ分野の研究仲間からの不断の刺激があったようなかつての研究環境が得られない今の立場では、科研費を通じたこうした研究仲間との交流が、今の私にとってかけがえのないそしてやりがいのあるものになっている。

3. 「変節」がもつ意味

以上、「変節」という語を用いることでこれまでの稿者の歩みを概観してみた。

一般に「変節」とは「堅く守って来た従来の態度や主義を変えること（『新明解国語辞典』）」とある。たしかに、これまで述べてきた4つの「変節」は、どれも自らのこれまでの考え方やスタイルを、自ら望んであるいは他からの影響で変えざるを得なかった経験ばかりであった。

しかし、今から結果的に思うに、それらはすべて自分を広げる・自分を拓くきっかけになっていたことも事実であった。その意味では、現場において研究を続けていくうえで、「変節」というのもけっして悪いことではないだろうと今つくづく感じている。

（平成19年03月02日）